

U-40 部会 presents リレーエッセイ ～私たちの体外循環史～

人工心肺装置における安全装置を考察して

日本体外循環技術医学会 U-40 部会 柿本将秀

はじめまして。U40 部会員を拝命しております、医療法人三重ハートセンターの柿本将秀と申します。このたび、村木様よりご指名を賜り、リレーエッセイを執筆させていただく運びとなりました。微力ながら務めさせていただきますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

気がつけば、体外循環業務に携わって約 15 年が経過しました。私は臨床工学技士と臨床検査技師のダブルライセンスを取得し、体外循環を担当する傍ら、心臓超音波検査などにも携わり、幅広い経験を積んできました。

当院は年間の症例数が多くないため、体外循環を担当する機会は月に数回と限られていました。そのため、自分が技術を習得しているのか、それとも少しずつ忘れてしまっているのか、不安を抱えながらの日々が長く続きました。それでも、経験を重ね、学びを継続することで、知識や技術を着実に蓄えてこられたのではないかと感じています。

そうした中で、私の知識の維持と向上において非常に大きな支えとなったのが、JaSECT（日本体外循環技術医学会）の存在でした。他施設の回路構成や運用方法に触れることで、実際の業務では得られない視点や情報を補うことができました。また、トラブルに遭遇する機会が少ない環境下でも、JaSECT 主催の実技セミナーで得た知識は、実際の現場で大いに役立ちました。特に、過去に経験した停電時の対応では、学会での学びが直接的に活かされ、大変貴重な経験となりました。

「症例数が少ないから仕方がない」と自分に言い聞かせながらも歩んできた 15 年間。しかし、近年、現場の在り方は大きく変わってきていると感じています。症例数の多い施設であっても、体外循環を専業とするスタッフは減少傾向にあり、多くの方が他の業務と兼任しているのが現状です。そのため、もはや「症例数の多さ＝熟練度」とは言えない時代になってきたのではないのでしょうか。

働き方改革の流れの中で、長時間労働が制限されるようになった今、限られた時間で効率的かつ確実に技術を習得することの重要性は、今後ますます高まっていくと考えています。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」—このオットー・フォン・ビスマルクの言葉は、今の時代を象徴しているように思います。かつては失敗を重ねながら技術を磨いていくしかありませんでしたが、現在では多くの知見やトラブル事例が収集・可視化され、学びの形も進化しています。

そうした情報を積極的に共有し、活用することで、体外循環の安全性や質は確実に高まっていくはずで、JaSECT がその「知のプラットフォーム」としてさらに発展し、次世代の育成や医療の安全向上に貢献していくことを、心より願っております。